

創業100周年を記念し 「社史ん集」を出版

株式会社ビドーのケース

10周年、20周年といった区切りの年に周年行事を行ったり、社史などの記録を編纂する企業は少なくない。創業100周年を記念して写真集を出版した中小企業に、そのコンセプトと製作の経緯について聞いた。

株式会社ビドー
所在地…大阪市東成区
業種…金物部品製造
社員…9名

編集部

大阪市東成区で襖や建具用の引手を中心に、建築関係の金物や木製品を製造・販売する株式会社ビドー。創業100周年にあたって株式会社ナガノから社名変更するとともに、「社史ん集」としてB5判68ページの記念写真集『NAGANO Inc.』を作成、関係者に配布するとともに、アマゾン等のルートで市販を開始した。

刀剣で培った金物技術から 建築家具の世界に

ビドーの源流は江戸時代まで遡り、刀の鐔などの装飾金具をつくる飾金具師を始祖とすると伝えられる。廃刀令をきっかけに、刀剣関係の仕事が減ったことから、金物の加工技術を活かそうと、建具用の戸引手など、建築関係の金物を手掛けるようになった。

長野孝豊社長（49歳）の曾祖



長野孝豊社長

父・長野又吉氏が長野製作所として創業したのが1915年（大正4年）で、そこから数えて昨年在100周年にあたった。主に建築関係の金物を製造し、企業としての歩みを重ね、1990年に株式会社ナガノに、2015年に株式会社ビドーに社名変更。ビドー（BIDDOOR）は「美しいドア」からきた造語で、1968年に商標登録しており、長年製品カタログなどで使用してきたブランド名を社名にもってきた、ということになる。その過程で製造部門を分離・独立させて協力工場にしており、現在はいわゆる「ファブレス」のメーカーだ。

2011年に代表取締役役に就任した長野社長は、創業100周年を迎えるにあたって、通販サイトのリニューアル、和をテーマにした新しいコンセプトの商品開発など、将来に向けた新たなプロジェクトを進めていた。

一方で、これまでの歩みを振り返る、思い出に残るものをつくりたいとも考えた。そこで頭に浮かんだのが、高校時代の友人を通じて知り合い、共通の趣味を通じて「タカポンさん」「いけちゃん」と呼び合う仲になっていた東京の写

真家・池田晶紀氏だった。

池田氏は株式会社ゆかい（東京都中央区）を主宰し、書籍や雑誌、CD・DVDのジャケット、広告等の撮影にとどまらず、自主出版、展覧会やワークショップの企画・運営など、写真を軸に多彩な活動を行なっている。

「会社を他者から客観的に見てもらったときに、何がおもしろいのか。私たちが思っているのと別のものが見えてくるかもしれない。それから写真を撮られるのであればポートレートを撮ってもら

いたかった。特に池田さんはポートレートが得意だと知っていたので、『この企画には彼しかない』と連絡しました」

外部からの目線を入れて 空気感を伝える

相談を受けた時点では、池田氏は長野社長がどのような事業をしているのか知らなかったそうだが、撮影を快諾した。



社員に交じって長野社長の家族、取引先まで撮影に参加（『NAGANO Inc.』より）

「私の実家が40年以上続いた写真館で、これまで100歳の人の写真などもたくさん撮ってきて、会社が100年も続くってすごいな、どんなことをしてきたのか普通に覗いてみたいな、と思いました。思い出の写真を撮ると、直接喜んでくれる人の顔がよく見える。そして、いい写真が撮れたら綴じてみたいし、いろんな人に届けたくなります。それで、いっそのことデザインと編集までセットして、内々の思い出づくりにとどまらず、私が面白いと感じたものを写真集として外に売ったらどのくらい反応がある

のか、試してみたいなとも思いました」（池田氏）

ゆかいには、それを可能にするデザイナーなどのスタッフが在籍しており、また販売ができるルートもあった。当初はなかった「写真集を市販する」という発想がここで出てきたのだ。

長野社長が池田氏に期待したのは、会社の特に変わったことのない1日を写真として切り取ってまとめることだった。

「100年の節目に社員みんなが背広を着て会社の門の前に立って、というかつちりした記念写真もあるでしょうが、そういう背伸びをする感じがあまり当社には向



『NAGANO Inc.』の表紙は職人の手と製品の写真

いていないかな、と。いつもと違う格好よい姿をして写るより、むしろあるがままの姿を切り取って残したい。そのあと、自分たちがどのように成長しているのかを比較するようにしたほうが、次のステップにつながるのではないかと、と思いました」

特に、2015年4月に予定していたビドーへの社名変更の前の姿を残したかった。

2015年のはじめ、打合せのために同社を訪れた池田氏は、もうひとつのアイデアを長野社長に提案する。池田氏が会社の中で向かい合っている人、撮っている同じ時間に、その周辺の風景をもう1人の写真家が撮影し、2つの目線を組み合わせる多角的に構成するという手法だ。

「目線を増やすことによって、同じ時間の中のものとの外のものとの比較しながら写真を見た人がその瞬間の空気、においみたいなものを感じられるようになるという、と思ったのです」（池田氏）

ここで異なる「目線」をもったもう1人の写真家として、川瀬一絵氏が撮影に参加することになった。ゆかい所属の川瀬氏は風景写真を得意とし、池田氏と一緒に作

品を制作することも少なくない。
ことしの3月に東京都美術館で開催された「TURN フェス」というアートプロジェクトでも、障害者が働く社会福祉法人の作業場で、池田氏が働く人の姿を、川瀬氏が周辺の風景を撮影した作品を出展していた。

「立派な社史」とは 違うものをつくりたい

日常をそのまま写して残す「100年目の1日」になったのは、社名変更を約2か月後に控えた2015年2月5日。

「池田さんに撮影してもらうことを社員に伝えたのは、その直前でしたね。『100周年の記念に写真家を呼んで撮影するので、よろしく』とさりげと言いました。写真を撮られることに抵抗感を示した社員もいましたが、『そのままの空間を切り取って記念に残しておきたいんで、いつもと同じ仕事をしてくれればいい。汚いところは汚いままでOK、むしろ掃除はしないほしい』と、意図を説明していくうちに、そういうのであれば別にかまわない、という雰囲気になりました」（長野社長）



乱雑なところも含め、あるがままの日常をそのまま切り取る（『NAGANO Inc.』より）

ドーの仕事、という協力工場の職人さんたちも撮影の対象となった。
池田氏が人々を撮影している間、川瀬氏が周辺の商店街、庭の木などを撮影した。
社内で談笑する社員、品番の記されたボード、乱雑に積み上げられた材料や加工品、箱に押すためのスタンプ、タイムカード、加工作業中の手、加工機械の一部……。まさに「写真を撮られるからといって、わざわざ掃除やおめかしをしていない」中小企業の日常風景がおさめられている。

「写真家としてどこに注目していたのか、できあがってきた写真を見たときに、『あつ、こういうところを切り取ったのか、なるほど』と思いました」（長野社長）

記念出版ということで、長野社長の挨拶が入っているという

オフィス風景や社内で社員が働いている姿はもちろん、取引のある問屋、近隣の協力工場など、長野社長が日ごろめぐっているようなところに池田氏が同行し、テレビ番組の『鶴瓶の家族に乾杯』のような調子で撮影を進めていったという。
「楽しく工場見学をしている気分でした。『ちょっとすいませ

のだが、そうした文章はない（正式な「創業100周年記念写真集」ということは奥付にきちんと入っている）。代わりにこの写真集ができた経緯と同社の歴史、撮影してみても感想についての文章を池田氏が寄せている。

冊子そのものは2015年の3月中にはほぼまとまっていたが、同時並行で進めていたプロジェクトが遅れがちだったこともあり、タ

イミングを合わせるということ、発行は2016年3月になった。

完成した写真集は被写体になった本人のほか、取引先、株主等にトータルで50部ほど配布した。あわせてビドーと発行元のゆかいパブリッシング、アマゾンで販売を開始した。

写真集を見て、社員がどういう感想を抱いたのかというと、撮っ

てもらって手放して喜んだ、という感じではなかったようだ。

波及効果の 大きな記念品

ちなみに、この写真集の印刷費用が250部のロットで30万円程度。このほか企画料、撮影料等がかかっている。

「記念に残るものとして、何かお客様への還元になるのか考えたときに、写真集の効果は大きいと思います。立派な社史もよいけれど、かえって『100周年といってもそんなに立派じゃない、普通です』というのを見せたほうが伝わるものだと、実際にやってみ

思いました」（長野社長）
なお、市販が売れているかについて池田氏に訊ねると、ぼちぼちといった程度だが、コンスタントに、予想していたよりは出ているとのこと。もともと売って利益を出そうという考えはなく、いずれ在庫がはけという程度で十分という。

「フォーマットはだいたいできたので、こうした形で働いている日常を切り取って写真集として残すことを、たとえば農家でやっても面白そうじゃないですか。セルパブリッシングの技術が進んで、100部単位で写真集ができる時代になったことはすごく大きい。1000部単位となると在庫を抱えるのが大変ですが、この部数なら関係者にばらまけば在庫リスクは考えなくていいから、実験ができます」（池田氏）

同業者や取引先の団体などからの受けもよく、ある取引先からは、ショールームで写真集と製品を同時に展示して「和」に関するイベントを開催したいというアイデアも出てきている。

「社史集」の効果は長野社長が予想しなかった形でも波及しているようだ。



作業工程まで見えるよう（『NAGANO Inc.』より）

加えて、私は『あるがままの現在の自分、現在の仕事環境そのものを切り取る』ということは何度も言っていましたので、それを汲んでくれたのか、撮影し